

令和5年7月29日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長 殿

学位(博士)論文審査の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 濱田 みゆき

学位論文題目

『白鯨』研究—物語世界と共鳴する音表現の諸相

(A Study of *Moby-Dick*:

Aspects of Sound Expressions Resonating with the Narrative World)

論文審査の概要

本論文は19世紀のアメリカ作家、ハーマン・メルヴィルの代表作『白鯨』(1851年)における音表現を分析し、それが物語世界においてどのような共鳴作用を生じさせ、それによっていかなるメッセージを提示しているかを検証したものである。音表現としては、語り手や登場人物の声やそのリズム、歌や楽器演奏などの音楽表現、鯨をはじめとする動物の鳴き声、自然環境や人の動作が発する環境音などを対象としている。メルヴィルはその経歴の後半において詩作に専念した作家であるため、『白鯨』が立体的な音景色(soundscape)で成り立っていることは以前から指摘されており、多くの研究者がそこに注目してきた。しかし、作品全体にわたって音表現を体系的に分析した研究はない。本論文は『白鯨』の音表現を種類別に分類したうえで、作品全体を詳細に分析し、結論として、人の声やそのリズムがもたらす労働者の一体感や、音楽表現がもたらす人種の境界を越えた多様な価値観の創出、動物の鳴き声や環境音もたらす人間と自然環境の一体性などが表現されていることを明らかにしている。

まず、第1章において『白鯨』の特異な物語構造について論じている。この作品は1850年と1851年の二つの時期にわたって執筆されているが、1851年にウィリアム・シェイクスピアとナサニエル・ホーソーンの影響を受けたことでその様相が大きく変容したと言われている。テキストには1850年の記述と1851年の記述が混在しており、両者を峻別する研究が行われてきた。本章ではジェームズ・バブアーや八木敏雄、寺沢みづほの先行研究を照らし合わせ、『白鯨』全体にわたってシェイクスピアの影響が強いとされる章(1851年に執筆されたと思われる章)を特定し、それを表にまとめている。

第2章では、第1章の分析結果を踏まえて、メルヴィルがホーソーンの短編作品について書いた書評「ホーソーンと彼の苔」やシェイクスピアの『リア王』を参照し、シェイクスピアとホーソーンが『白鯨』の音表現にいかなる影響を与えたかについて論じている。ホ

一ゾーンからは自然描写の背後にあるカルヴァン主義的な原罪意識、そして、シェイクスピアからは狂気の中で真実を捉えようとする態度を受け継いだとされる。そうしたコントラストが『白鯨』132章におけるエイハブ船長の態度に反映しており、セリフのリズムや抑揚を形成するに至ったとしている。

第3章では、本論文の主要な目的である音表現の分析を行っている。基本的なアプローチとして、登場人物のセリフや語り手イシュメールの語りに、韻律や抑揚、リズムを読み取っている。まず第1節「音声表現について」において、マッブル神父やエイハブ船長らのセリフが分析され、口述的コミュニケーションによる共同体構築の可能性や、それとは逆に社会統制に向けて行使される影響力などが考察される。また、捕鯨という労働において、個人が宗教や人種の違いによって互いに理解できない発話をしながらも、必要に応じて声を揃えて力の一つにする場面などが描かれているとしている。第2節「音楽表現について」は、登場人物たちが歌を歌い、タンバリンを打ち鳴らす場面について論じている。特に、メルヴィルが19世紀前半のアフリカ系アメリカ人による聖霊降臨祭ピンクスター・フェスティバルについて知識を有しており、それをを用いて黒人少年ピップのタンバリン演奏を描いたことを紹介している。第3節「声をもたない鯨」は、捕獲される鯨が声を使わずにその呼吸音を発しながらもがく様子を取り上げている。声をもたない動物が存在するとしても、その姿に耳を澄ませることで生命の息吹を読み取ることができると表現されているという。第4節「環境音の表現について」は、エイハブの義足による足音や海に投げ捨てたパイプの火が消える音、大工が使う小槌の音などを分析し、語り手イシュメールの視点からは聞こえないはずの音が多数描写されており、それによって多元的な音世界が展開されていることを明らかにしている。第5節「文字について」は、文字による言語的意味の固定を極力回避する方策として、イシュメールが自作の詩を刺青として腕に刻もうとした決意やクイーケグが自分の身体から棺桶に転写した刺青の意味などを考察している。本章は、無音から物音、音声、さらには音楽へとつながるコミュニケーションが、『白鯨』における人と環境の関係性において非常に大きな役割を果たしていることを明らかにしている。

第4章は、第3章の分析結果と第1章で検証したシェイクスピアの影響を照合し、執筆時期による音表現の種別分布を提示している。それにより、シェイクスピアの影響によって戯曲形式の章が挿入されたことは認めながらも、メルヴィルが広範な口述文化を取り入れたことを明らかにしている。

第5章では、論文全体を総括し、先行研究との見解の違いを明らかにしつつ、あらためて、『白鯨』の音表現が多様な要素から成り立ち、それらが共鳴して人間と環境の一体性やそこに生じる価値の多様性を表現していることを確認している。

これまで『白鯨』の音表現について多くの研究者によって指摘がなされてきたにもかかわらず、作品全体についてその分析を行った研究は存在しない。その中で本論は『白鯨』の音表現を総合的に分析し、その叙事詩としての側面を考察した貴重な研究であると評価できる。その一方で最終試験ではいくつかの大きな問題点も指摘された。例えば、第3章では作品の章の順番に沿って議論が進められているが、それによって重要なテーマが集中的に論じられていないという問題が生じている。鯨が声を出せないとする議論と「白鯨の白さ」に表れた虚無性の比較、すなわち、声の欠落と色の欠落の比較などもなされておらず、細部の議論が全体に結び付けられていない。また、第4章で提示された表では大雑把な音表現の分布しか示されておらず、章の間での音表現を介した細かい横の繋がりが読み取れない。もっと詳細な分析を行い、音声や音楽表現、環境音等の間での関係性や音のレベルや種類を含めて、音表現が作品全体を通してどのような展開をしているのかを明らかにすべきだったのではないかと。さらに、音楽起源論に関する議論の中で言語起源説、感情起源説、旋律起源説の分類があったが、この説明が分かりにくい。第3章では“sing out”という表現を音楽表現の根拠として扱っているが、本来“sing out”には「叫ぶ」という意味がある。それを音楽表現の根拠として使うのであれば、この時代の用例を調査してそこに音楽的要素が介在することを示すべきではないかと。以上のような指摘がなされた。

これらの疑問に対し、学位申請者である濱田みゆき氏より内容を修正して対応するとの回答があり、資格審査委員会としてもそれが可能であると判断したため、本審査の結果を「合」と判定した。

授与する博士学位 学術

論文審査結果 合

審査委員

主査 (氏名) 竹内 勝徳

副査 (氏名) 柴田 健志

副査 (氏名) 丹羽 謙次

副査 (氏名) 松平 安典

